

平成 22 年 6 月 21 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19791674

研究課題名 (和文) 電子メディア時代における看護学生のコミュニケーション構造

研究課題名 (英文) Relationship between communication skills and text message dependence in nursing students

研究代表者

柴田 早苗 (SHIBATA SANAE)

明治国際医療大学・看護学部・講師

研究者番号：30440895

研究成果の概要 (和文)：本研究は、看護師を含む医療系学生を対象に、近年急速に普及している電子メディア、特に携帯電話メールへの依存状態と対面でのコミュニケーション能力との関連を明らかにした。携帯メール依存尺度の下位因子得点によって3つに分類した依存群のうち、「低利用・高依存群」ではその能力に問題点が見出された。問題点とは、対面コミュニケーションでの過敏性が高い、自己開示することに抵抗がある、集団に馴染めないなどである。これは電子メディアを媒介としたコミュニケーション(CMC)の特徴と親和性を示す傾向でもあり、今後コミュニケーション教育を考える上での方向性が示唆された。

研究成果の概要 (英文)：Students who aspire to become healthcare professionals, the present study investigated the relationship between interpersonal communication skills and dependence on digital media. Based on subscale scores, text message dependence was classified into the three clusters. Interpersonal communication skills in the high dependence group were exhibited marked communication problems. This problems included excessive sensitivity to interpersonal communication, difficulty in expressing oneself, and inability to blend into social groups. The above findings show the characteristics of computer mediated communication (CMC) and its effect on interpersonal affinity, and provide a basis for future communication education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
総計	1,400,000	210,000	1,610,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護学生・コミュニケーション・電子メディア

1. 研究開始当初の背景

J.Travelbee がコミュニケーションを「人間対人間の関係の確立をすることができるようにし、そのことによって看護の目的を実現させるプロセスである」と述べている通り、看護におけるコミュニケーション能力は必須の条件といえ、看護基礎教育の中でも重要視されている。しかし、現代の学生は少子化のなか「個」を重んじる教育、パソコン・携帯電話など電子メディアに囲まれた生活、メールに代表される非対面型の文字コミュニケーションが一般的となった時代背景のなか育ってきている。平成 16 年の内閣府調査によると「人間関係が難しくなった」と回答した者は 63.9%となっており、「知らない人と自然に会話する」に対して「できない」と回答した 15～17 歳の青少年は 23.9%にも及んでいる。そのような学生たちが患者と向き合う時、コミュニケーションに戸惑いや不安を感じているという問題が放置できない現状にある。コミュニケーションに問題を抱えるということは、対象を理解し、看護上のニーズを満たすといったことに問題を抱えてしまうことに直結するといえる。そこで、学生のコミュニケーション能力を分析・構造化し、電子メディア特有の性質がどのように影響しているのか、その関連性を明らかにしていくことが、看護教育における早急的課題であると考えられた。

2. 研究の目的

学生のコミュニケーション能力に電子メディアの利用とその特有の性質、また他の要因がどのように影響しているのか、その関連

性を明らかにしていくことが、本研究の目的となる。

3. 研究の方法

(1)対象者：対象者は医療系専門学校および大学に在籍する学生とし、研究の趣旨を理解し研究協力に同意が得られた専門学校 3 校、大学 4 校の学生とした。なお、医療系学生とは看護師、鍼灸師、柔道整復師のいずれかの国家試験受験資格を得る教育課程に学ぶ者である。

(2)データ収集：医療系学生の在籍する専門学校・大学の管理責任者へ研究目的、調査内容、倫理的配慮について説明し、研究協力を依頼した。研究協力の同意が得られた後、質問紙配布依頼状、対象者への研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を郵送した。また対象者への研究協力については、研究目的、調査内容、自由意思の保証、個人情報保護等、自己決定と匿名性の保証および調査に関する問い合わせ先について文書および口頭で十分に説明し、同意を得た上で調査を実施した。質問紙の回収は学校単位でとりまとめて投函する方法を用いた。また対象校が近隣である場合は、研究実施者が直接説明を行い、回答をしてもらうようにした。研究参加の同意については、質問紙への回答、提出をもって得られたものとした。

(3)調査内容：①年齢、性別、携帯電話所有の有無、携帯電話を使い始めた年齢、1 日の携帯メール利用頻度。

②携帯メール依存尺度（短縮版）

③九州大学コミュニケーションスケール

④社会的スキル尺度

(4)分析方法：対象者の基本的属性および携帯メール依存尺度、コミュニケーションスケール、社会的スキル尺度の基本統計量を求めた。また携帯メールへの依存状態によって、コミュニケーションスケールや社会的スキルにどのような関係があるかを明らかにするため、t検定および探索的データ分析としてクラスタ分析を行い、依存状態の違う本質的なグループを作成した上で、一元配置分散分析およびTukeyのHSD検定で有意差検定を行った。

4. 研究成果

(1) 携帯メール依存尺度の基本統計量およびコミュニケーションスケールとの性別による比較；携帯メール依存尺度の下位因子の得点、および総合した得点に関して、いずれも高得点者の割合は女性に多く、すべての尺度得点において、男性より女性の方が高かった。また携帯メール高依存群と低依存群でコミュニケーションスケールを比較した結果、女性ではコミュニケーションスケールの下位因子「対人過敏性」において携帯メール高依存群が有意に高く($t=3.85$ $p<.001$)、「アサーティブネス」($t=3.68$ $p<.001$)、「集団への適応」($t=3.455$ $p=.002$)は携帯メール低依存群が有意に高かった。男性はコミュニケーションスケールの下位因子すべてにおいて有意差はみられなかった。よって、携帯メールへの依存が高い女性は対人過敏性が強く、大勢の中で話すことや異なる意見を言うこと等に抵抗を感じる傾向があるが、男性は依存が高くても、コミュニケーションには影響しないことが明らかとなった。

(2) 携帯メール依存尺度によるクラスタ分

類；個人レベルにおける携帯メールへの依存状態を明らかにした上で、コミュニケーション能力について分析するため、携帯メール依存尺度をもとに類似している対象同士を集めたクラスタを作成した。携帯メール依存尺度の下位因子である「情動的な反応」「過剰な利用」「脱対人的コミュニケーション」それぞれの得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、3つのクラスタを得ることができた。

第1クラスタは携帯メール依存尺度の下位因子がすべて高得点であり、過剰な利用とともに精神的にも高い依存状態を示していた（高利用・高依存群）。一方、第2クラスタは同下位因子の得点はすべて低値であり、低い依存状態を示していた（低依存群）。第3クラスタは精神的に高い依存状態を示すものの、量的に過剰ではないことを示していた（低利用・高依存群）。

(3) 携帯メール依存のクラスタ分類とコミュニケーション能力との関係；第2クラスタ（低依存群）は、対人過敏性が低く、自己開示ができ集団への適応性も高いことから、対面でのコミュニケーション能力が最も高いことが明らかとなった。一方で第3クラスタ（低利用・高依存群）は、対面コミュニケーションにおいて、人の反応に過敏となり、自己開示できない、集団になじめないといった傾向を最も示し、社会的スキルも低いことが明らかとなった。しかし、同じく精神的な傾倒を示すが、過剰な利用をする第1クラスタ（高利用・高依存群）では、その傾向が低くなる。つまり、携帯メールを過剰に利用するか否かが、対面コミュニケーションにおける傾向に作用していることが分かった。「過剰に利用する」が示すのは、何時間も続けてメールのやりとりをしたり、人と話しながらでもメール

ルをするなど、いわゆるメール回数の多さを指す。携帯メールを用いて交わされるコミュニケーション内容は概して短文でいわゆる気楽な用件であるといえるが、過剰に利用する者にとっては、その利用により対人関係を保ち、対人関係を広げているとも推察できる。また先行研究によると、過剰な利用は社会的スキルと正の相関を示していることから、対人関係を円滑に進めることや、非言語スキルの感受性に優れるといった傾向を持ち合わせているとも推察される。これらのことから携帯メールを頻繁に利用することは、対面でのコミュニケーション能力を低下させているとは言えないことになる。しかし、メール利用は過剰でないものの、メールの返事が来ないと不安になる、メールでしか自分の本心を伝えられないといった精神的な高い依存を示す者は、対面でのコミュニケーション能力が全般的に低いということに着目しなければならないといえる。

(4)CMC (computer mediated communication) の特性と対面コミュニケーションとの関連；CMC の大きな特性の1つとして情報濾過機能があげられる。情報濾過機能とは対面場面では伝わるはずの視線、身振り、社会的手掛かりといった情報が欠落してしまうことを意味する。また非直接性・不同期性の要因が加味されることで、コミュニケーションに伴う対人圧力が低下することが明らかとなっている。このことから携帯メールでのコミュニケーションは、対人圧力の低下した状態でのコミュニケーションということが出来る。故に「メールでしか自分の本心を相手に伝えられない」「メールがないと新しくできた友達との関係が続けられない」といった精神的に傾倒している者は、そのCMCの特性を反映し、対人圧力の低下した状態の方が自己

開示をしやすい傾向を持っているといえる。また、その裏を返せば対面コミュニケーションにおいては対人過敏性が高く、自己開示に戸惑うといった要因には、対人圧力が加わることが脅威となっていることが推察される。また若年期からの携帯メールの利用、またそのコミュニケーション形態に親和性を持つことは、対面コミュニケーションの際に交換される非言語情報の符号化、解読化の学習をする機会を失わせていることも危惧されるところである。

(5)まとめ；携帯電話の利便性と現在の情報化社会を考えると、携帯電話と密着した生活は続き、それに加えてCMCは今後ますます拡充されていくと考えられる。そのような中で、携帯メールへの依存状態を示す学生によっては、対面での過敏性が高く、特に対象者を前にしたコミュニケーションでは過度の緊張感を伴うこと、また対象者から送られてくるメッセージ（非言語情報）の符号化、解読化が困難なことも予想される。学生の能力を見据えて現実に即した対応をするためにも、本研究で明らかとなったコミュニケーションの傾向は、今後のコミュニケーション教育のねらいを定める上で、また授業をデザインする上で、ひとつの方向性を示してくれているといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計4件)

①柴田早苗、医療系学生の携帯メールへの依存とコミュニケーションとの性別による比較、日本看護学教育学会第18回学術集会、2008

②柴田早苗、医療系学生の社会的スキルと携帯メールへの依存との関連、日本看護学教育

学会第18回学術集会、2008

③柴田早苗、コミュニケーションに影響を与える携帯メール依存の因子別検討、第28回日本看護科学学会学術集会、2008

④柴田早苗、携帯メールへの依存状態の違いによる臨地実習でのコミュニケーションの変化、第29回日本看護科学学会学術集会、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴田 早苗 (SHIBATA SANAE)

明治国際医療大学・看護学部・講師

研究者番号：30440895